

特別支援学校におけるESDによるアクティブ・ラーニングの教育実践(1) — 生活単元学習における花壇づくりの活動を通して

谷村佳則

Educational Practice of Active Learning by means of ESD in Special Needs Education School
: Through the Activity of Making Flower Bed as Life Unit Study
TANIMURA Kazunori

キーワード：ESD アクティブ・ラーニング 生活単元学習 教育環境づくり

概要：筆者は、南九州大学人間発達研究第4巻（2014）において、「特別支援学校におけるESDを展望した教育実践」～生活単元学習における花壇づくりの活動を通して～のテーマの基で、前任校である岩手大学教育学部附属特別支援学校中学部で取り組んだ、生活単元学習の教育実践の取り組みを紹介した。また、その実践成果を基に、ESDを展望して児童生徒に育てていきたい力と教育支援の在り方について考察を行った。

本稿は、前研究を継続するとともに、ESDの提起する学び方・教え方と次期学習指導要領の論点整理で示された「アクティブ・ラーニング」のつながりを整理することで、連続性のある多様な学びの場となるべき、持続可能な開発のための教育であるESDの在り方について、特別支援学校の教育実践例から考察したものである。

1. はじめに

2015年8月26日に中央教育審議会教育課程企画特別部会より論点整理の報告が行われた。この論点整理では、次期学習指導要領での学習活動の示し方や「アクティブ・ラーニング」の意義が強調され、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」が明確化された。

そこで、ESDの提起する学び方・教え方と次期学習指導要領の論点整理で示された「アクティブ・ラーニング」のつながりを整理していくことから、特別支援学校での教育実践からみたアクティブ・ラーニングの在り方について論述を進めていくこととする。

2. ESDとアクティブ・ラーニングについて

(1) ESDの学び方・教え方による教育的効果

2005年12月27日、「国連持続可能な開発のための教育の10年」に係る施策の実施について、関係行政機関相互間の緊密な連携を図り、総合的かつ効果的な推進を図るため、内閣に関係省庁連絡

会議（以下、「連絡会議」という。）が設置された。

連絡会議では、ESDの目標として、以下の3点を述べている

- 1 すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。
- 2 持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。
- 3 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすこと。

また、ユネスコ（UNESCO）によれば、「ESDが全体として目指すのは、積極的な環境的及び社会的な変革を実践するために、参加型・行動志向型のアプローチを伴いながら、市民をエンパワーすることである。」と述べており、ESDの学び方・教え方として、以下の3点を提起している。

- 1 「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること。

2 単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探究や実践を重視する参加型アプローチをとること。

3 活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと。

さらに、日本ユネスコ国内委員会教育小委員会ESD特別分科会が、「ESDは、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）を実践するものとして効果的である。」としている。

(2) 論点整理から捉えたアクティブ・ラーニングとは

現行学習指導要領の基本理念「生きる力」の一つである、確かな学力を推進するエンジンとなるのは、子供の学びに向かう力である。また、これを引き出すためには、実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを図り、学びに向かう意志を喚起する必要がある。この点から、次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育むために、学びの量とともに、質や深まりが重要であるとされ、「どのように学ぶか」に光が当たった。この結果、次の3つの視点が示されたのである。

- 1 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。
- 2 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- 3 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

この3つの視点は、「1 深い学びの過程」、「2 対話的な学びの過程」、「3 主体的な学びの過程」となり、「学びを深め、広げ、高める」ことにつながる。これを踏まえて子供の資質や能力を育み展開していくことが、アクティブ・ラーニングの本質である。

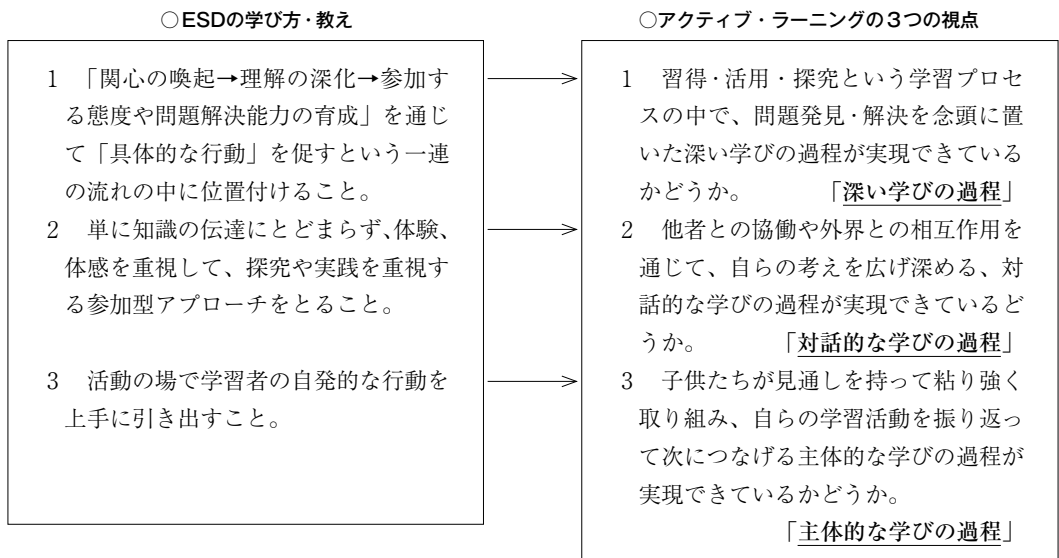


図1 ESDの学び方・教え方とアクティブ・ラーニングの3つの視点における関連図

(3) ESDとアクティブ・ラーニングのまとめ

ESDは、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びを実践するものとして効果的である。「何のために、何を、どのように、学ばせるのか」という課題において、アクティブ・ラーニングは、このなかの「どのように学ばせるか(学ぶか)」に相当する。

この点からも論点整理では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成の上で、ESDの学び方・教え方に当たる「どのように学ぶか」が、アクティブ・ラーニングの本質として考えられるようになったものとする。

ESDの学び方・教え方の3点と、アクティブ・ラーニングの3つの視点である学びの過程の関連性をまとめたものが、前頁の図1である。

3 ESDによるアクティブ・ラーニングを取り入れた実践例

2007年度に岩手大学教育学部附属特別支援学校 中学部の全生徒、職員で取り組んだ、生活単元学習「きれいにしよう！蝶ヶ森～花壇をつくろう～」の実践例から、アクティブ・ラーニングの3つの視点に対応した学びの過程を紹介する。

(1) 本単元設定の理由と学習活動の概要

蝶ヶ森山頂の展望台は盛岡市内を一望できる場所にあり、町内の方々の憩いの場となっている。学校からも近い場所にあり、本校の生徒が訪れることも多い。この地域の財産をもっと有効に活用するためには整備が必要であるという地域の声と、同じくきれいにしたいと日々感じていた我々の思いから、この場所の整備に取り組むこととした。

整備の主な活動内容は、花壇の設置であるが、これは「花がたくさんあれば、きれいになる。」という、ある生徒の思いのこもった発言から取り入れた活動である。そのため、花壇用の杭の製作、草取り、土作りなど、働く活動が中心となる。授業の作業学習で行っている、作業製品を製作し販売することで売上金などの収入を得るための労働ではないが、日頃から訪れている場所が、自分たちの力で美しく変わっていく様子は、作業の見通しがもちやすく、働くことのやりがいや生きがいといった活動への意欲につながるものと考えた。

そして、地域の方々にも喜んでもらえるような価値のある仕事に取り組むことで、生徒の主体的な姿と社会生活力の育みが期待できるものと考えたのである。

(2) 「1 深い学び」：問題発見・解決を念頭に置いた過程

本校の盛岡市東安庭地区にある「蝶ヶ森」(標高229_㍎・写真1)は、中学部でも、日頃から体育の授業のミニ登山(写真2)として足を運ぶなど、馴染みの深い場所である。その山頂の展望台付近をきれいに整備してほしいという要望が、地域の方々から盛岡市役所に出されていた。その話を生徒に伝えたら、「蝶ヶ森の道は、よくゴミが落ちていてきれいじゃない。」「ミニ登山で登るたびにそう思っていた。」という、課題の発見につながる声が増えるようになった。その後、親しんできた蝶ヶ森をより美しく整備していくためにはどうしたらよいかという課題を投げかけたところ、「中学部全員が力を合わせて取り組んでいけばできる。」「花がたくさんあったら、きれいになる。」「花のある花壇を作ろう。」という意見が出た。

この生徒の自発的な意見を地域の町内会長さんに伝えたと、町内会長さんが盛岡市役所に連絡してくださり、蝶ヶ森の整備に向けた許可をいただくことができたのである。こうして、問題発見から解決の学びに向けた動機付けと意欲が喚起されたのである。



写真1 蝶ヶ森山頂の展望台



写真2 蝶ヶ森までのミニ登山

(3)「2 対話的な学び」：他者との協働や外界との相互作用による過程

1つ目の視点である深い学びの過程を通して、蝶ヶ森を整備するという課題を、町内会長さんと盛岡市役所の方と共有することで、課題解決に向けた一体感を持つことができた。この一体感を大切にしながら、2つ目の視点である対話的な学びの過程に取り組んでいくために、次の7点の手立てを考えた。

- ① 激励や称賛の声掛けを行い、意欲的に時間いっぱい活動に取り組むようにする。
- ② 同一作業種のグループ編制により、間近で同じ作業を行う仲間や教師の姿を見て影響を受け、意欲を高めるようにする。
- ③ 町内会長さん、市役所職員といった外部の方とのかかわりにより、活動に対する意欲を高めるようにする。
- ④ 必要に応じて近くの店を利用し、実際の買い物を行うことで、地域の方々とのかかわり合いを広げるようにする。
- ⑤ 花壇杭ユニット製作の進行状況等を話題にしなが、意欲的な取り組みができるようにする。
- ⑥ 写真入りの通信を毎日発行し、保護者や他の学部の職員にも活動内容と生徒の主体的な姿を伝えるようにする。
- ⑦ 全員で蝶ヶ森に登って進捗状況を見る機会を設けたり、蝶ヶ森で活動するグループが出入りする場所を校内で活動する杭作りグループの場所に側にするなど、違うグループであってもお互いの活動が分かるようにする。

写真3、4、5は、手立ての②として、同じ目的に向かう仲間として一体感もちながら、3つのグループに分かれて活動している場面である。杭作りグループは、学校の作業室を活動場所とし、花壇作りグループと柵作りグループは、蝶ヶ森の展望台を活動場所とした。活動場所は異なっても、同じ目的意識を持ちながら、お互いに称賛や励ましの声を掛け合いながら対話を図ることで、グループ内の仲間とのかかわりを広げていた。



写真3 杭作りグループ



写真4 花壇作りグループ



写真5 柵作りグループ

次に、手立ての⑥、⑦として、花壇杭は校内の作業室で製作するのだが、できあがった花壇杭は体育の時間を利用して、みんなで蝶ヶ森の山頂まで運ぶこととした(写真6)。普段、学校で活動している「杭作りグループ」のメンバーは、こうした機会に山頂で活動する他のグループの様子、作業の進捗状況を確認し対話を図ることで、協働意識を高めることができた。さらに、山頂までの行き帰りにおいて、地域の方々と出会い、挨拶を交わす場面が必然的に出てきた。これは、生徒の活動内容を知っていただく機会となり、そのことで励ましの言葉をいただくなど、生徒と地域の方々との相互作用が働くことへもつながった。



写真6 製作した花壇杭の運搬

手立ての③では、他者と協働するという活動を生み出し、対話等を通してかかわりあい、コミュニケーション面での力を発揮することにもつながる内容として、学校以外の方々と接し、共に活動する場面を設けた。写真7は、展望台付近で活動する花壇作りグループの活動であるが、土をふるいにかけて石や根を取り除く作業を、町内会長さんとともに声をかけながら行っている生徒の様子である。

また、写真8は、盛岡市役所の職員が作業の様子を見に来た際に、集まって励ましの言葉を聞いている様子である。この後、生徒たちは、自ら「ありがとうございます。」とあいさつするなど、直接的なかかわり合いの中で、自分たちと同じように蝶ヶ森をきれいにするための、目的を共有できる人々であるという意識を持つことができた。こ

のにより、蝶ヶ森の整備が周りから期待され、注目されることで、意義ある価値の高い活動に取り組んでいるという活動への意欲ややりがいにつながり、学習の主体者である生徒の力の発揮に大きく関与することとなった。



写真7 町内会長さんと一緒に活動



写真8 盛岡市役所の方々との対話

(4)「3 主体的な学び」：見通しを持って取り組みにつなげる過程

本単元の主な活動内容は、花壇の設置であるが、これは「花がたくさんあれば、きれいになる。」という、ある生徒の思いのこもった発言から取り入れた活動である。このため、花壇用の杭の製作、草取り、土作りなど、働く活動が中心となった。日頃から訪れている場所が、自分たちの力で美しく変わっていく様子は、作業の見通しが持ちやすく次時の活動への意欲につながっていった。やりがいや目的意識を持って作業に取り組むことで、教師や生徒間のかかわりも活発なものとなり、次々

と作業を進めたいという意欲から要求や報告をしたり、他の生徒の様子を見て励みにし、応援したりといった様子が見られるようになった。

また、花壇が完成し、共に取り組んだ方々と記念写真(写真9)を撮った単元終了後には、達成感や満足感の声とともに、「もっと花壇があればいいな。」「展望台もきれいにしたいな。」という、成功体験からくる自尊感情の高まりから、新たな活動への自発的・自主的な声も聞かれた。この活動への主体的な動機付けを大切に、翌年度は、花壇の設置箇所をさらに増やし、活動期間も拡大するなど、持続可能な単元計画を生徒と共に立案しながら教育実践を行うこととなったのである。



写真9 完成した花壇の前で記念写真

4 まとめと考察

本単元では、人的環境として地域の町内会長さんや盛岡市役所の方々、物理的環境としては蝶ヶ森という自然環境、店舗、学校の作業場といった、より現実的な社会と必然的にかかわることができるような社会的環境の整備を目指した単元設定を行ってきた。このことが、地域の方々、盛岡市役所、保護者の方々からも、生徒の行う花壇づくりが期待され、意義のある価値の高い活動に自分たちが取り組んでいるという、活動への意欲ややりがいにつながり、学習の主体者である生徒の力の発揮に大きく関与したものと考えられる。

このことは、ESDの目標でもある「1 すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。」「2 持続可能な開発のために求められる原則、価

値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。」の達成につながり、生徒の社会生活力の育成にもつながる成果であったと考える。

また、これまでの単元と同様に、繰り返し活動に取り組むことにより、働く力が生まれ、以前よりも一人で行うことができる仕事量が増えた生徒も多くみられた。特に3年生は、これまでの生活単元学習の様子を振り返ると大きく成長し、体力面や技術面のみならず、リーダーシップを発揮し、積極的に活動に取り組むようになったといえる。

このことも、ESDの目標である「3 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすこと。」の達成につながり、高等部進学後の学習活動又は卒業後の就労に向け、進んで問題を解決し、主体的に行動する力の育成にもつながる成果であったと考える。

本単元を通して、生徒一人一人が活動の手順を理解できるようになり、各自の仕事量も増えてきたため、前述した成果を受けて、翌年度は、花壇の設置箇所をさらに増やし、活動期間も拡大するなど、持続可能な単元計画を生徒と共に立案しながら教育実践を行った。この持続した生活単元学習の実践は、生徒が活動へのやりがいや生きがいを求め、より大きな成就感を得られる教育実践となった。

ユネスコの提起するESDの学び方・教え方が、「どのように学ぶか」に視点が置かれることで、論点整理ではアクティブ・ラーニングとして捉えられた。このため、今後のESDの教育実践は、学びの過程として提起している3つの視点を取り入れた、アクティブ・ラーニングの具現化につながるものと考えられる。

最後に、図2は、アクティブ・ラーニングによる授業構想図である。特別支援教育では、児童生徒が、「今できていること」、「今もっていること」を、ポジティブな面から把握し、それを手掛かりに「共感・提案・支援」でかわり、その成長過程を評価していく授業実践を通して、主体的・協働的な学びを行っている。これを、指導場面に当てはめると、次のようになる。共感「Aさんは、これができるの、すごいね」→提案「このようにすると、もっとできるようになるよ」→支援

「一緒にやってみようか」。この共感・提案・支援の流れは、教師が子どもの力を見取り、引き出す授業の発展に結びつくのである。アクティブ・ラーニングの授業実践を行う前に、「教師や学校が変わ

らなければ、持続可能な社会作りの担い手（学習の主体者である児童生徒）を育むことはできない。」のである。

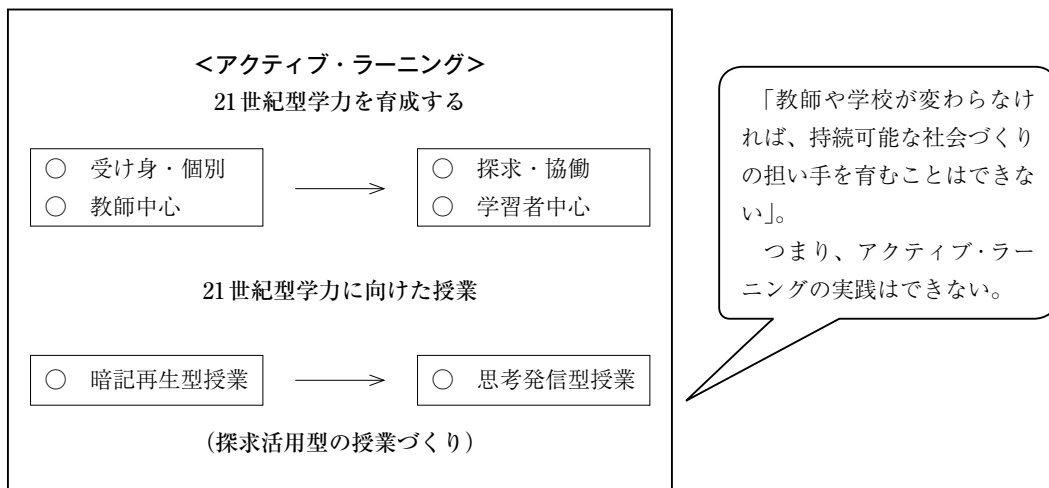


図2 アクティブ・ラーニングによる授業構想図

参考・引用文献

- 1) 「研究紀要第19集」、岩手大学教育学部附属特別支援学校、(2007年)
- 2) 谷村佳則・高橋勉・最上一郎・田淵健・鎌田文聰・我妻則明・宮崎眞、「個々の教育的ニーズにこたえ、社会生活力を育み支援していくための授業実践（1）－研究の経過とエンパワメント概念の確定－」、岩手大学教育学部研究年報、第66巻、P1－11、(2007年)
- 3) 谷村佳則・田淵健・稲邊宣彦・我妻則明・鎌田文聰・宮崎眞、「個々の教育的ニーズにこたえ、社会生活力を育み支援していくための授業実践（2）－エンパワメントを生かした授業づくりを通して－」、岩手大学教育学部研究年報、第67巻、P105－118、(2008年)
- 4) 谷村佳則、「特別支援学校におけるESDを展望した教育実践－生活単元学習における花壇づくりの活動を通して－」、南九州大学人間発達研究第4巻、P68－75、(2014年)
- 5) 谷村佳則、「特別支援学校における持続可能な開発のための教育（ESD）を展望した教育実践例」、日本発達障害学会第49回大会発表論文集、P78、(2014年)
- 6) 谷村佳則、「特別支援教育とESDの関連性に関する研究－ユネスコスクールと特別支援教育の教育課程を通して－」、南九州大学人間発達研究第5巻、P57－61、(2015年)
- 7) 谷村佳則、「ESDによるアクティブ・ラーニングの教育実践例－生活単元学習における花壇づくりの活動を通して－」、日本発達障害学会第51回大会発表論文集、P110、(2016年)